

鮮やかな夏の初体験⑥

～彼女の願望——セックスで気持ち良くなりたい！編～

※この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。

※実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

俺は自転車のペダルを力強く踏み込んで、友達の家へ向かっていた。

近距離だ。歩いても十五分もあれば着く距離なのに、俺はわざわざ自転車を選んだ。

目的地に着くと、俺は即刻インターホンを押した。

「ピンポン」という電子音が響き渡った瞬間、家の奥からどたどたと大きな足音が聞こえてきた。

扉が開く。

そこに立っていたのは、巨漢としか言いようのない男だった。

「孝史、いらっしゃい。熱かったやろ？ 入ってくれや」

竹馬の友、健司だ。

「おじゃまします」

俺は軽く頭を下げて中に入った。

今日は健司の公務員試験の勉強を手伝うために来た。

一時間ほど経った頃、健司がふと口を開いた。

「里桜ちゃんとはどうや？ 仲良くいってるんか？」

「上手くいってるよ」

俺は正直に答えた。

「いっつもその返答やな。おまえら喧嘩とかしないんか？」

「たまにするけど、すぐに仲直りだよ」

「健司の方はどうなんだよ？ 茉莉ちゃんだけど」

健司は自信満々に胸を張った。

「もちろん、上手くいってるで」

そして、しばらくして。

健司は何気ない調子で言った。

「でも、エッチの時も相変わらず、気持ちよさそうにしてるわ」

性に関することを、彼はいつも簡単にさらけ出す。

初体験の時も、俺が何も聞かぬうちに自分から報告してきた。

「そうか」

俺は少し安心して、話題を戻した。

「じゃ、あとちょっとだ。勉強の続きするか」

「おう！」

彼らしい、力強い返事だった。

◆ ◆ ◆

健司の家を出て、俺は再び自転車のサドルに跨った。

ペダルを踏み出すと、夕暮れの風が汗で濡れた肌を優しく撫でてゆく。

その時だった。

耳の奥に、さっきの言葉が引っかかった。

「気持ちよさそうにしとるわ」

あれ？

里桜って……本番の時、気持ちよさそうにしてたっけ？

自転車のスピードが、自然と落ちる。

記憶が、ゆっくりと蘇ってくる。

里桜の細い身体が、俺の下で小さく震えていたこと。

息を潜めるようにしていたこと。

声を押し殺すように、唇を噛んでいたこと。

俺は彼女を抱くたびに、優しくしているつもりだった。

痛みを与えないように、ゆっくりと動いて、彼女の反応を窺いながら進めていた。

だが――

本当に、彼女は気持ちよかったのだろうか。

健司の言葉が、胸の奥に小さく刺さる。

里桜は……どうだった？

俺はペダルを踏み直し、夜風の中をゆっくりと走り始めた。

――本当に、よかったのか？

その問いが、夏の夜の空気の中で、静かに俺の心を掴んで離さなかった。

◆ ◆ ◆

その頃。

里桜もまた、同じことを考えていた。

自室の薄暗い明かりの中。

デスクトップのモニターを眺めながら、彼女は小さく呟く。

「これって……絶対演技だよな……」

画面を止め、頬杖をつく。

前戯は、確かに気持ちいい。

孝史に触れられることも、愛されることも好きだ。

でも――。

「……本番でこんなに気持ちいいとか、感じないんだけど」

ネットで調べれば、セックスで気持ち良くなったという女性の体験談はいくらでも出てくる。

なら、自分との違いは何なのだろう？

経験？

身体？

それとも、二人のやり方？

考えれば考えるほど、疑問は大きくなっていく。

そして里桜は、ついに一つの結論へ辿り着いた。

「とりあえず、実践だ！ 実践！」

スマホを手取る。

連絡先一覧から選んだ名前は――

「孝史」。

折角、好きな人とするなら。

もっと、もっと気持ち良くなりたい。

そして、自分だけじゃない。

孝史にも、もっと気持ち良くなってほしい。

里桜の小さな願望から始まった、二人の新しい「実践」。

まだ経験の浅い二人は、自分たちなりの方法で身体を重ねながら、

少しずつ――

「二人とも気持ちいいセックス」を探していくことになる。

――体験版はここまで――

「本番でも、もっと気持ち良くなりたい」

里桜の素朴な願望に、孝史はどう応えるのか。

そして二人が試した、いつもとは少し違う方法とは――？

続きは製品版でお楽しみください。